

大黒屋光太夫とフランス革命情報

専修大学文学部教授・歴史学研究センター代表

青木 美智男

Michio Aoki

フランス革命が日本に伝えられたのは、1794年(寛政6)の「和蘭風説書」による情報が一番早いといわれている。ところがこの情報は革命6年後にもたらされた。そこでこの「和蘭風説書」より早く日本に情報が伝わっていたのではないか、という説が生まれた。元専修大学教授の林基さんの仮説である。林さんは1971年刊『国民の歴史』16「享保と寛政」(文英堂出版)の「大黒屋光太夫の謎—フランス革命と日本—」という章で、その可能性について論及している。

漂流民大黒屋光太夫は、1792年(寛政4)ロシア使節ラックスマンの来航とともに帰国した。「和蘭風説書」で革命情報をもたらされる2年前の事である。たしかに光太夫が滞在していたころのロシアでは、フランス革命の経緯が逐次伝えられ大きな反響をよんでいた。とくに特権階級に属していた革命思想家ラディシチュフが、フランス革命に影響されてロシアの農奴制を断罪した『ペテルブルグからモスクワへの旅』と題した本を刊行し、女帝エカテリーナ二世の逆鱗に触れて死刑を宣告された。後に罪一等減じられてシベリア流刑となり、ロシア中で大きな話題になっていた。そのため発禁となった彼の著作はかえって有名になり、フランス革命がロシアの多くの知識人たちのあいだに知られるようになってしまったと言われている。エカテリーナ二世は、フランス革命を「フランスの疫病」と名づけ、ロシアへの波及を非常に恐れた。そして彼女をして、ラディシチュフを「フランス革命初期のロシア特派員」であり、プガチョフの反乱の指導者より「もっとひどい悪人」とまで言わしめた(H・カレル・ダンコース『エカテリーナ二世』下、志賀亮一訳、藤原書店、2004年、622頁)。

林さんは、ちょうど帰国を請願するためシベリアからペテルブルグに向かう光太夫一行が、イルクーツクとモスクワの間点であるトボリスクという町で、シベリアへ送られていくラディシチュフと出会うチャンスがあったと想定し、そこでラディシチュフから光太夫は、フランス革命について聞かされていたのではないかと推測するのである。

ところが林さんがこの推論を書く三年前に、作家井上靖さんが『おろしや国酔夢譚』(文芸春秋社、1968年、文春文庫、1974年)で、この二人の出会いを描いていた。ただ井上さんは、二人が挨拶し直接会話をしたという場面を想定しておらず、

光太夫が遠くから注目した人物の一人として描いているに過ぎない。そこで出会いの場面を引用しておこう。

知事はア・ウエ・アリアビエフという人物であった。学問や芸術が好きで、この町に初めて劇場を建て、印刷所を作ったことを何よりの自慢にしていた。毎夜知事の邸宅には、この町の数少ない知識人が招かれて一つのサロンを作っていた。光太夫はラックスマンに連れられて、その知事の家の夜の集まりに顔を出した。そこで二人の人物に注意を惹かれた。

一人は優れた作曲家として知られている知事の息子であり、一人はこの国の有名な思想家でシベリアへの追放途上にあるラディシチュフという中年の貴族であった(『おろしや国酔夢譚』文春文庫、220頁)

と、光太夫が注意を惹かれた人物の一人として取り上げられている。そして知事の口から「ラディシチュフの経歴を一座の者のために詳しく話して聞かせた」とすれば、彼がタタール系貴族の出身で、女帝によってライブツィヒに派遣され、フランス文学とルソー、モンテスキューなど啓蒙思想家たちの著作に親しみ、ロシアの「百科全書派」の代表的人物であって、ロシアに戻ればこうした観点から農奴制に矛盾を感じた人物であると紹介されたに違いない。

林さんと井上さんという錚々たる知識人がこうも書くと本当のように思えてしまう。しかし光太夫は帰国後、フランス革命について一言も語っていない。もしお二人が推測するように光太夫がラディシチュフからフランス革命情報を得ていて、事実をありのままに幕閣に伝えていたとすれば、「和蘭風説書」の記事に疑問が生まれ、その後の日蘭関係に大きな変化があったことは十分予測しえることである。



専修大学社会知性開発研究センター

歴史学研究センターの活動

2006年度の活動

4月 歴史学研究センター活動4年目を迎える

10月 第4回公開講座「フランス革命とヨーロッパ」開催

11月 第4回国際シンポジウム「アジアの近代とフランス」開催

2007年度開催予定の公開講座、国際シンポジウムに向けて準備開始

3月 『会報』第4号発行

『年報』第4号発行

『フランス革命と日本の近代化

—「世界史」教科書のなかのフランス革命—発行

2007年度の活動予定

6月 第5回公開講座の開催

10月 第6回公開講座の開催

11月 第5回国際シンポジウムの開催

3月 『会報』第5号発行
『年報』第5号発行